

平成23年度

# 札幌大谷中学校入学試験

英数選抜・英数コース

## 国語

50分 100点満点

### 受験上の注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開けてはいけません。
2. 解答用紙は、この冊子の間にはさんであります。
3. 試験監督の指示があったら、解答用紙を抜き出し、受験番号、氏名、出身小学校名を記入してください。
4. 問題は①～②まであり、12ページまで印刷してあります。答えは全て別紙の解答用紙に記入し、解答用紙のみ提出してください。
5. 質問がある場合は、静かに手をあげ、試験監督が来るのを待ってください。
6. 試験終了の合図と同時にすみやかに解答をやめて、以後は試験監督の指示に従ってください。
7. 問題の都合上、原文とは一部表現を変えています。

① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある冬の夕方、私は私のほかに一人も乗客のいない横須賀発上り二等客車にすわって発車の笛をまっていた。私の頭のなかにはいいようなない疲労と倦怠とがどんよりとした影を落としていた。やがて発車の笛がなり、同時に私の乗っている二等室の戸ががりりと開き、十三、四の少女が一人、あわただしく中へ入ってきた。

それは油気のない髪をひつつめの銀杏返しに結って、横なでの痕のあるひびだらけの両頬を氣持の悪いほど赤くはてらせた、いかにも田舎者らしい娘だった。あ 垢じみた萌黄色の毛糸の襟巻がだらりと垂れ下がった膝の上に、大きな風呂敷包みがあった。そのまた包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事そうにしっかりと握られていた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかった。それから彼女の服装が不潔なものややはり不快だった。最後にその二等と三等との区別さえもわきまえない愚鈍な心が腹立たしかった。だから巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたらいいという心もちもあって、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上にひろげて見た。するとその時夕刊の紙面に落ちていた外光が、突然電灯の光に変わって、刷りの悪い何欄かの活字が意外なくらい鮮やかに私の目の前へ浮かんできた。言うまでもなく汽車は今、横須賀線に多いトンネルの最初のそれへはいったのである。

しかしその電灯の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱を慰むべく、世間はあまりに平凡な出来事ばかりで持ち切っていた。講和問題、新婦新郎、流職事件、死亡広告——私はトンネルへはいった一瞬間、汽車の走っている方向が逆になった錯覚を感じながら、それらの索漠とした記事から記事へほとんど機械的に目を通した。が、その間ももちろんあの小娘が、い 卑俗な現実を人間にしたような面持ちで、私の前に座っていることを絶えず意識せずにはいられなかった。このトンネルの中の汽車と、この田舎者の小娘と、そうしてまたこの平凡な記事に埋まっている夕刊と、——これが象徴でなくてなんであろう。 I の象徴でなくて何であらう。私は一切

がくだらなくなつて、読みかけた夕刊をほうりだすと、また窓枠に頭をもたせながら、死んだように眼をつぶつて、うつらうつらし始めた。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅かされたような心もちがして、思わずあたりを見まわすと、いつの間にか例の小娘が、向こう側から席を私の隣へ移して、しきりに窓を開けようとしている。が、重いガラス戸はなかなか思うようにあがらないらしい。あのひびだらけの頬はいいよ赤くなって、時々鼻涙をすすりこむ音が、小さな息の切れる音といっしょに、う 耳へはいってくる。これはもちろん私にも、いくぶんながら同情をひくに足るものには相違なかった。しかし汽車が今まさにトンネルの口へさしかかろうとしていることは、暮色の中に枯れ草ばかり明るく照らした山腹が、間近く窓側へ迫ってきたのでも、すぐに合点の行くことであつた。え この小娘は、わざわざしめてある窓の戸を下ろそうとする、——その理由が私にはのみこめなかつた。いや、それが私には、単にこの小娘の気まぐれだとか考えられなかつた。だから私は腹の底に依然として険しい感情を蓄えながら、あの霜焼けの手がガラス戸をもたげようとして悪戦苦闘するようすを、まるでそれが永久的に成功しないことでも祈るような冷酷な眼で眺めていた。すると間もなく凄まじい音をはためかせて、汽車がトンネルへなだれこむと同時に、小娘の明けようとしたガラス戸は、とうとうばたりと下へ落ちた。そうしてその四角な穴の中から、煤を溶かしたようなどす黒い空気が、

えなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、ほとんど息もつけないほど咳き込まなければならなかつた。が、小娘は私に頓着する気色も見えず窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛をそよがせながら、じつと汽車の進む方向を見やっている。その姿を煤煙と電灯の光の中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明るくなって、そこから土の匂いや枯れ草の匂いや水の匂いが冷やかに流れ込んでこなかつたなら、ようやく咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、また元のように窓の戸をしめさせたのに相違なかつたのである。

しかし汽車はその時分には、もうやすやすとトンネルをすべりぬけて、枯れ草の山と山との間にはさまれた、ある貧

しい町はずれの踏切に通りがかかっていた。踏切の近くには、いずれも見すばらしい藁屋根や瓦屋根がごみごみと狭苦しく建てこんで、踏切番が振るのであろう、ただ一旗のうす白い旗がものうげに暮色を揺すっていた。やっとトンネルを出たと思う——その時その蕭索とした踏切の柵の向こうに、私は頬の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立っているのを見た。彼らは皆、この曇天に押しすくめられたかと思うほど、そろって背が低かった。そうしてこの町はずれの陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた。それが汽車の通るのを仰き見ながら、いつせいに手を挙げるが早いか、いたたいけな喉を高く反らせて、なんとも意味のわからないかん声を一生懸命にほとばしらせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出して例の娘が、あの霜焼けの手をつとのばして、勢いよく左右に振ったと思うと、たちまち心を躍らすばかり暖かな日の色に染まっている蜜柑がおよそ五つ六つ、汽車を見送った子供達の上へばらばらと空から降ってきた。私は思わず息をのんだ。そうして刹那に一切を了解した。小娘は、おそらくこれから奉公先へ赴こうとしている小娘は、その懐に蔵していた幾顆の蜜柑を窓から投げてわざわざ踏切まで見送りにきた弟たちの労に報いたのである。

## II

暮色を帯びた町はずれの踏切と  
——すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ないほどはつきりと、この光景が焼きつけられた。そうしてそこから、ある得体の知れない朗らかな心もちが湧きあがってくるのを意識した。私は昂然と頭を挙げて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視した。小娘はいつかもう私の前の席に戻って、相変わらずひびだらけの頬を萌黄色の毛糸の襟巻に埋めながら、大きな風呂敷包みをかかえた手に、しっかりと三等切符を握っている。私はこの時始めて、言いようのない疲労と倦怠とを、そうしてまた不可解な、下等な、退屈な人生をわずかに忘れる事ができたのである。

芥川龍之介『蜜柑』より

- \* 「倦怠」——だるくて何もする気にならないこと。
- \* 「ひつつめの銀杏返し」——ふくらみをつけず無造作に後ろに引き詰めて、銀杏の葉のように結った日本髪。
- \* 「萌黄色」——緑がかった黄色。
- \* 「愚鈍」——判断力が鈍く、何をさせても満足にできない様子。
- \* 「漫然」——ぼんやりしている様子。
- \* 「洗職」——汚職の古い表現。
- \* 「索漠」——心が満たされず寂しい様子。
- \* 「卑俗」——下品でいやしい様子。
- \* 「頓着」——気にかけること。
- \* 「鬢」——頭の左右の耳より前の髪。
- \* 「一旗」——ひとつの旗。
- \* 「蕭索」——もの寂しい様子。
- \* 「刹那」——瞬間。
- \* 「昂然」——自信に満ちて元気な様子。

問一——線ア～オの漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二——あ　く　え　に入る適当な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　にもかかわらず　　イ　あたかも　　ウ　せわしなく　　エ　すると　　オ　しかも

問三——I　に入る最も適当な言葉を、十四字で本文の中から抜き出して答えなさい。(句読点も一字に数える)

問四——線①で「なんとも意味のわからないかん声を一生懸命にはとばしさせた」とあるが、ここでの弟たちの気持ちを説明しなさい。

問五——線②で「一切を了解した」とあるが、どんなことを了解したのか説明しなさい。

問六——線③で「ある最も適当な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。」

- ア 粗末で不潔な着物を着た      イ 寂しさにひしがれたような表情をした      ウ こびとのように背が低い  
エ 小鳥のように声を挙げた      オ 名残をおしむように寂しさをたたえた

問七——線③で「ある得体の知れない朗らかな心もち」とあるが、私がそのような心もちになった理由を説明しなさい。

問八 汽車の中のできごとをながめていた「私」の気分が、「暗い気持ち」から「明るい気持ち」へ変化したのは本文中のどこからか。初めの十字を抜き出して答えなさい。

問九 芥川龍之介の作品を次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 舞姫      イ 杜子春      ウ 坊っちゃん      エ 山椒魚      オ 鼻  
カ ころも      キ 山椒大夫

② 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

へビをあらわすのに二百以上、ライオンをあらわすのに五百以上、そして鷹をあらわすのに千以上の同義語がアラビア語にはあるという。ちよつと信じがたい語数だが、それだけアラビア人にはこうした生物に注意をはらってきたのだろう。

おなじ対象にいくつもの言葉があるということは、それだけその対象についての関心の度合いが高いことである。アラビア人にかぎらず、遊牧民族の言語には羊や馬や駱駝など、自分たちの生活にきわめて関係の深い家畜に対して数多くの名詞が与えられている。たとえばモンゴル人はおなじ駱駝であっても、それを細かく分けて、牝の去勢していない駱駝をボーラ、五歳以上の去勢した牝の駱駝をアタ、五歳以上の牝の駱駝をインゲ、一歳の仔駱駝をポトゴ、野生の駱駝をハプトガイ、そして駱駝を総称してテメーと呼ぶという。(小沢重夫『素顔のモンゴル』) こうした言葉の多様さは、そのものに対する関心度のシヒヨウといってもいいのだ。

さて、このような観点からあらためてわが日本語をかえりみると、ただちに気づくのが「わたし」という一人称の多様さである。日本語ほど一人称代名詞に多くのバラエティを与えている言葉はほかにないのではあるまいか。「わたし」「わたし」に始まり、「ぼく」「われ」「おれ」「自分」「手前」「うち」「わし」「それがし」「吾が輩」「当方」「こちら」「小生」、さらに「あつし」とか「あたい」とか、「わて」とか、「おいら」「ちとら」といったもので加えれば、その数、ゆうに二十を越えるという。英語やフランス語、ドイツ語などでは一人称の代名詞はそれぞれ、**Ich** たった一語である。それに対して日本語には、なぜこんなにたくさん「自分」をあらわす言葉があるのか。それは日本人が他の民族よりも、ひと一倍「自分」に注意を払い、「自己」に深い関心を持っていることを語っているのだろうか。

端的にいえばそうである。しかし、だからといって日本人に自我意識が強いとは必ずしもいえそうにない。いや、むしろ欧米人に対して日本人は「自分」を主張することがずつとひかえめであり、日本では「個人」という意識、「我」の自覚が西欧人にくらべてかなり遅れているというのが、**通説** になっている。たしかに日本で個人主義がメバえたのは、ようやく第二次世界大戦後といってもいい。そして現在に至っても「個」の意識はまだまだ希薄で、日本の社会全体は画一主義で貫かれている。画一主義とは没个性的ということであり、要するに「個」が「全体」に埋没してしまっている状況である。それなのに、日本人が他民族よりも「自分」に注意を向け、つねに「自己」を意識しているといえるのだろうか。

じつは日本人の自己意識は他民族、たとえば欧米人のそれとは質的に異なっているのである。ヨーロッパ人は自分というものを**実体的**にとらえようとする。自分というのは、それこそ、かけがえない存在であり、独立した一人の人格と信じている。ヨーロッパの哲学が古代ギリシアのむかしから一貫して求めてきたのは、ただひたすら「自分」というものの本質であった。「なんじ自身を知れ!」というデルフォイの神託を哲学の出発点としたソクラテス、「われ思う、ゆえにわれあり」を哲学の原点に据えたデカルト、「人間とは自分の存在を自覚した存在者だ」とするキルケゴール……ヨーロッパの哲学史は、「自分」という実体へ向かつての旅だったといってもよい。

それに対して日本人は自分という一人の人間を実体としてでなく、機能として考えてきた。個人はけっして単独に存在するのではない。つねに「世間」で他のタセイの人たちとさまざまな人間関係のなかで生きるのだ——というのが日本人の人間観の前提だった。げんに「人間」という言葉自体がそうした考え方を正直に語っている。この言葉はいうまでもなく中国から受け入れた漢語であるが、この漢語の意味はもともと人間の世界、すなわち「世間」ということなのである。ところがそれが日本ではいつの間にか「人」そのものをあらわす言葉になった。ということは、日本人にとって「世間」も「人」も同一のようになってしまうからにちがいない。日本人は**社会と個人を一体化して**考えてきたのである。

日本人はヨーロッパ人のように自然と対決するのではなく、自然に親しみ、自然に い することによって安

らぎを得てきた。それと同じことが社会についてもいえる。日本人は欧米人のように個人を社会に [ ] するこ  
となく、世間と自分を [ ] をひとしなみに表象してきたのだ。「渡る世間に鬼はない」という諺がその一端を語っている。  
日本の自然が優しい山河であるように、日本の世間も——他民族の社会とくらべれば—— [ ] ケツコウ、心安い社会だっ  
たからであろう。

むろん、日本には地震をはじめとして自然の災害も少なくない。同様に、日本の社会もあまえていればそれですむとい  
うほど寛容なものであったとも思えない。世間の目は往々にして冷たいのである。しかし、多くの異民族が [ ] は  
しているのが常態であるような他の国々とちがって、日本はきわめて [ ] に [ ] 的な社会であり、自然のきびしさも、  
ほかとくらべればずっと気楽なものといえる。そして、日本人の人間観や「自分」意識は、このような風土の産物といっ  
てよい。こうした社会では、人びとは自分を主張し、世間と [ ] へ [ ] して生きるよりも、自分をかえりみ、世間と  
いう人間関係のなかでの自分の立場をつねに意識して、社会に [ ] へ [ ] して生きようとするのである。

日本語で一人称の代名詞がこれほど多いというのは、まさしく右のような事情によるのではなからうか。というのは、  
日本語の人称代名詞は時と場合によって使い分けることによってその数をふやしていったとみていいからである。  
つまり、「わたし」とか「わたし」とか「ぼく」とか「おれ」あるいは「こちら」「当方」といった自分をいいあらわす言  
葉は、話す相手によって使い分けられ、微妙な人間関係を証言しているのである。これらの言葉は実体としての「自分」  
をさまざまな角度から考えるために生まれたのではなく、「自分」というものの立場をさまざまに配慮して、あくまで  
機能的に、対人関係に即してかえりみるところから数をふやしていったのだ。したがって、日本語における一人称代名  
詞の数の多きは、日本人がそれほど「自分」について意識している証拠とみるより、それだけ日本人が対人関係を気に  
していることを語っているというべきであろう。じつさい、日本人である私自身、相手によって「わたし」というべき  
か、「ぼく」というべきか、「おれ」といってもいいか、それこそ無意識のうちに心を配っているのである。

(……………中略……………)

たとえば男の使う一人称代名詞の「ぼく」という言葉は、いうまでもなく「僕」からきており、つまり、男が相手  
に対してへりくだった意味で使った言い方である。ところが、現在では逆に「おもに同等以下の相手に対して使う」  
〔『広辞苑』言葉とされており、「おれ」も「主として男が同輩以下の者に対して用いる」(同前)と、その用法がはつ  
きりと示されている。おなじように、「あたし」とは「わたし」のくだけた言い方とされており、「わたし」とは「わた  
くし」のよりくだけた用法とある。このように、日本語の一人称代名詞には——二人称も同様であるが——かならず  
ずとといっていいほど、その用法が添えられている。つまり、目上の人に対するとき、あるいは同等の人間にいうとき、  
さらに自分よりも下の相手に向かうとき、人称代名詞は無意識のうちに変わるのである。日本語を習得する外国人にとつ  
て何よりもむずかしいのは、こうした<sup>①</sup>人称代名詞であろう。なぜなら、外国にはこうした人称の変化はほとんどない  
からである。日本語を学ぶためには、まず相手をみきわめたうえで言葉をえらぶクレンを積み重ねなければならない。しか  
し、それはよその人間にとって、何と至難なことであろうか！

森本哲郎『日本語 表と裏』より

- \* 「去勢」——動物の繁殖を防ぐなどの目的で牡の生殖腺を取り去ること。
- \* 「端的」——明白なさま、手っ取り早いさま。
- \* 「通説」——世間一般に認められ、広まっている説。
- \* 「神託」——神のおつげ。
- \* 「寛容」——心がひろく、失敗をとがめ立てせず、許すこと。
- \* 「常態」——普通の状態。

問一——線アくオのカタカナを漢字で書きなさい。

問二——線Ⅰ・Ⅱの意味を次の中から選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「ひとしなみに表象してきた」

Ⅱ「往々にして」

- ア 人に知られないように守ってきた
- イ 家族のように思ってきた
- ウ 同じように考えてきた
- エ 関係をこわさないように保ってきた

- ア あっちもこっちも
- イ いつも
- ウ ともすれば
- エ たいへん

問三——線Ⅲの「べき」と同じ意味で使われているものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 子供なら親を敬うべきだ。
- イ 予測すべからざる事態が起きた。
- ウ ついに来るべき時が来た。
- エ 神わざともいふべき芸当だった。

問四——線①「日本語には、なぜこんなにたくさん『自分』をあらわす言葉があるのか」の理由について述べた表現を、「くから。」に続くように、本文の中から十五字で抜き出して答えなさい。

問五——線②「実体的にとらえようとする」とはどうすることか、五〇字以内で説明しなさい。

問六——線③「社会と個人を一体化して考えてきた」と同じ内容を表現しているところを本文の中から二〇字以内で抜き出して答えなさい。

問七——

い	く	へ
---	---	---

に入る言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 同居
- イ 対決
- ウ 同化
- エ 協調
- オ 同意
- カ 対置
- キ 同質

問八——線④「こうした」の指す内容を十五字以内にまとめて答えなさい。

問九 本文の内容に合うものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本語に「自分」をあらわす言葉がたくさんあるのは、日本人が他の民族よりも、ひと一倍「自分」に注意を払い、「自己」に深い関心を持っている証拠でもある。

イ 日本人は第二次世界大戦後、欧米人の自己意識の在り方を積極的に取り入れて、画一主義で貫かれている社会で暮らすことから来る没個性なところを改めようとした。

ウ 日本人はきびしく冷たい「世間」の荒波の中で、甘えて生きることが許されず、社会に流されないしつかりとした自分をつくり上げてゆくことが求められてきた。

エ 日本語の一人称の代名詞は、「世間」におけるさまざま人間関係の中で、自分の立場を意識することによって微妙な人間関係をうまく生きてゆくために生まれてきた。